

東京大学総合研究博物館小石川分館

[建築博物教室](#) 第 10 回

演出のアーキテクチャ —— 歌舞伎のセリ上げを巡って

日時：2016 年 4 月 9 日 (土) 13:30-15:00

講師：ベンヤミン・フィツェンライター(武蔵野美術大学大学院 博士 (造形) / 日本視覚文化研究)

建築博物教室レポート

建築博物教室第 10 回は、「演出のアーキテクチャ——歌舞伎のセリ上げを巡って」と題し、ベンヤミン・フィツェンライター先生による講演が行われた。

講演のメインテーマである「セリ」は役者や大道具を舞台上へと押し上げる舞台装置のことである。本講演は、まず映像作家としての視点で歌舞伎舞台を研究しているベンヤミン先生が「どうして歌舞伎舞台に興味を持ったか」という動機の紹介から始まった。そして「並木正三とセリ上げ」、「セリ上げの推定復元」、「セリ上げの演出」と続き、最後にご自身の制作した作品を解説された。

17 世紀初頭に京都で生まれた歌舞伎だが、実際にその舞台に「セリ上げ」が登場し、発達したのは 18 世紀のことである。当時大坂では人形浄瑠璃が圧倒的な人気を誇り、歌舞伎は消失の危機にあった。そこで、登場するのが今回の主役「セリ上げ」装置を生み出した並木正三である。からくり・歌舞伎・人形浄瑠璃 3 つの世界を渡り歩いた並木正三は最終的に歌舞伎の世界へと戻り「作者・舞台美術家・技術者」としての才能を携え、様々な有名な歌舞伎作品を創り上げたのだ。1 つは「けいせい天羽衣」であり、初演では巨大な「セリ上げ」が利用された。

「けいせい天羽衣」は現在では上演されておらず、ベンヤミン先生はまずその「セリ上げ」の復元を行った。舞台の形を復元する為に現存する江戸時代と明治時代の芝居小屋や先行研究、当時の資料を調査し、当時の大坂歌舞伎舞台の「付け舞台」はより深く、プロセニウム・ステージに近かったことを推測した。また、歌舞伎舞台には人形浄瑠璃の舞台の影響があったことから、舞台の正面性が高く、巨大な舞台装置の発展を可能にしたのではないかと考え舞台復元を行った。次に「セリ上げ」の形を推定復元した。様々な資料を基に「けいせい天羽衣」の文学的な内容と視覚的表現を読み取り、「セリ上げ」の推定復元モデルを完成させたのである。

ではこの「セリ上げ」はどのように使われ、どのような役割があったのだろうか。「セリ上げ」によって舞台上に大道具がセリ上ることで、観客を驚かせ、スペクタクルな印象を与えることができるとのことだった。今回、復元モデルによる「けいせい天羽衣」の再現映像を通じて、当時の人々が感じたであろうスペクタクルな印象を追体験することが出来た。

「セリ上げ」はで色彩と形によって建物を写實的に表す“大道具”とシンボリックに使われ

垂直的な動きをする“仕掛け”という2つの部位に分けられ、これらが観客の視覚に訴えてくるのである。この「垂直的な動き」は仮想の世界における「出来事を中心の移動」を表す手段であり、現代のCGやカメラ移動の演出と似ている。これにより、「セリ上げ」は舞台上の仮想空間を拡張していくという特性を持つこととなった。加えて、「セリ上げ」は舞台上の空間を「垂直化」させ、舞台が上下空間に分かれるという特徴が生まれるのだ。仕掛けにより仮想空間の中心が動かされると、観客の視野が広がり、舞台上にまるで錦絵のような絵画的な「正面性」が出来上がるのである。ここには舞台の内容を超越した、「天と地」「上下」のような信仰や哲学、社会性などの思想が含まれ、民俗学的な意味合いも含まれていると考えることが出来るのだ。このように、「セリ上げ」には単純に観客を驚かせる「スペクタクルな印象」を与えるほかに、舞台演出の幅を広げ、空間的・時間的な可能性を広げる表現手段となったのである。

最後に、ベンヤミン先生の作品として、今回のメインである『舞台装置「大道具のセリ上げ」の構造』など立体的な作品に留まらず、平面的な作品、そして舞台美術に関するドキュメンタリー映像作品が紹介された。中でも並木正三の生活を描いたからくり付きの紙芝居は、本来3次元である舞台装置を2次元で表現しており、実際に紙芝居上のからくりが動いた際には拍手と歓声が沸き起こり、惜しまれながらも講演は終了した。

途中挟まれた休憩時間には多くの参加者が、セリ上げの舞台装置の動く様子をじっくり観察したり、動画に収めたり講師に直接質問をしていた。また、講演の後に設けられた質疑応答の時間にも、ベンヤミン先生が日本の面白さはどこに感じたのか、他の国にもセリ上げのような舞台装置はあるのかなど多くの質問が寄せられた。両時間ともにとっても活気あふれる充実した時間だった。

今回の講演にあわせて、前述のベンヤミン先生が復元した『舞台装置「大道具のセリ上げ」の構造』が、アーキテクトゥニカ・コレクションとして常設展示に加わった。展示室内では実際にセリ上げ装置を動かすことは出来ないが、復元された模型を見ながら、当時上演されていた「けいせい天羽衣」の様子を思い浮かべてみてほしい。

(高橋彩華／小石川分館学生ヴォランティア)